『弥生日記』実地踏査

井上麻美
加藤華
美濃羽紘子

一、はじめに

『弥生日記』に描かれている卓池や秋挙の風雅な旅の足取りを辿ることを目的に、平成二十五年十月二十日に実地踏査を行った。実施踏査するにあたり着目したのは、『弥生日記』冒頭の「花、ものいはねどよく人をとゞむ。そのとゞめらるゝ花をこそたづねめ」という記述である。この記述から、卓池らが花見をするための風雅な旅をしたと考え、その足取りを辿った。踏査後、『弥生日記』本文の記述・江戸時代の絵図・現代の航空写真・そして実地踏査の折に撮影した写真を併せて、彼らが辿ったであろう道筋を検討した。その結果、わり出すことができた道筋とその地の様子を本稿では紹介する。今回踏査を行ったのは、八橋（無量寿寺）、衣の里（挙母神社）、花園山（村積山）の三か所である。なお、文中の図は平成二十五年度図書館貴重書講演会で使用したパワーポイントの画像である。

二、八橋、無量寿寺

『弥生日記』の冒頭の中には、「まづ八橋の沢辺にさまよひきて」という記述がある。この記述を頼りに最初は八橋に赴いた（図1）。この記述に登場する「八橋」は有名な歌枕のひとつである。在原業平がこの地を訪れて詠んだ、かきつばたの花の「か」「き」「つ」「ば」「た」の五文字を詠みこんだ歌である「唐衣着つつなれにし妻しあればはるばる来ぬる旅をしぞ思ふ」が詠まれた場所として知られている。この逸話は『伊勢物語』九段に見られ、八橋に咲くカキツバタが愛知県の県の花と指定されたり、愛知県立大学の学章がカキツバタとなっている理由はこの逸話による。

この記述から、卓池らがはじめに無量寿寺の周辺を散策していたことが分かる。無量寿寺は、愛知県知立市・名鉄三河八橋駅のすぐそばにあり、杜若の名所として知られている寺である。卓池らが散策をした季節は春であるため、歌枕「八橋」の情趣に加え、桜の咲く春の風情をも味わったことが想像される。

また、無量寿寺には、「かきつばた我に発句の思ひあり」という芭蕉の句碑がある（図2）。

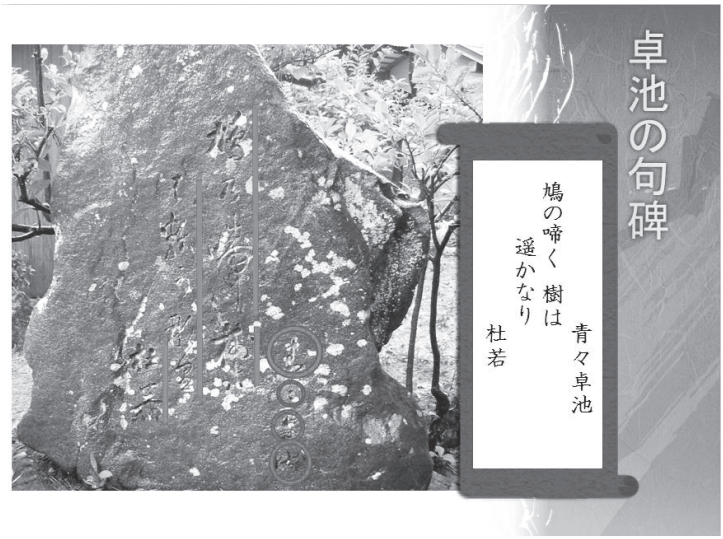
貞享二年（一六八五）の四月四日、現在の名古屋市緑区あたりに住んでいた弟子の邸宅で連句の会が開かれた。その会に芭蕉も参加しており、この句はその時に発句を勧められて詠んだものと言われている。発句には、歌を詠んだ時の季節を表す語を詠みこむ約束があり、この句の場合は夏の語句「杜若」がその語句に当たる。芭蕉の、俳諧に対する自信と気概に満ちたこの句は、初句「かきつばた」によって、折句の歌を詠んだ平安の業平と、芭蕉の姿とが重なる句とも捉えられる。そうした句であったことから、かきつばたの名所にふさわしいとされ、この地に句碑が建てられたと考えられる。この句碑が建てられたのは安永六年（一七七七）であるため、卓池らが八橋を訪れた時にはすでにこの句碑はあり、当然この句碑を見ていたものと言える。卓池たちは、八橋の風情を、芭蕉句碑からも感じ取っていたのであろうか。


まづ八橋の沢辺にさまよひきて
新豊田駅
豊田市駅
矢作川
名鉄三河線
八橋
無量寿寺
三河八橋駅
知立市
安城市

(図 1)


芭蕉句碑
かきつばた我に発句のおもひあり
（杜若　我に発句の　思ひあり）
句碑の建立は安永六（一七七七）年

(図 2)



（図 3）

無量寿寺には卓池の句碑（図３）も建てられている。風化していて読みづらいが、「青々卓池」とあることが分かる。この句碑には、「鳩の啼く樹は遥かなり杜若」という句が刻まれている。陰暦五月のころ、八橋の地に咲いている杜若を見ていると、遠くの木のあたりから鳩の鳴く声がする、という情景が詠まれた句である。

鳩の鳴き声からは、藤原良経の正治初度百首歌「夕まぐれ小高き森に住む鳩の一人友呼ぶ声ぞさびしき」という和歌が想起され、物寂しいイメージを醸し出す。卓池らはおそらく良経のこの歌を知っており、杜若とともに句に詠み込むことで、幽遠な情景を表現したのだろうと思われる。

卓池の来歴を調べると、はっきり分かっているところでは、彼は二度この八橋を訪れている。一度目は文化十二年（一八一五）、二度目は文政七年（一八二四）であり、二度目の訪問が『弥生日記』に書かれている時のことである。

この句碑は、卓池が病没した年に、弟子の山本翠錦によって建てられた。このことは句碑の裏側に刻まれているが、現在は風化が進み、ほとんど読めない状態になっている。句碑は、生前の業績を讃えて建てられるものであり、亡くなった年の内に建てられていることから、卓池の俳人としての実力



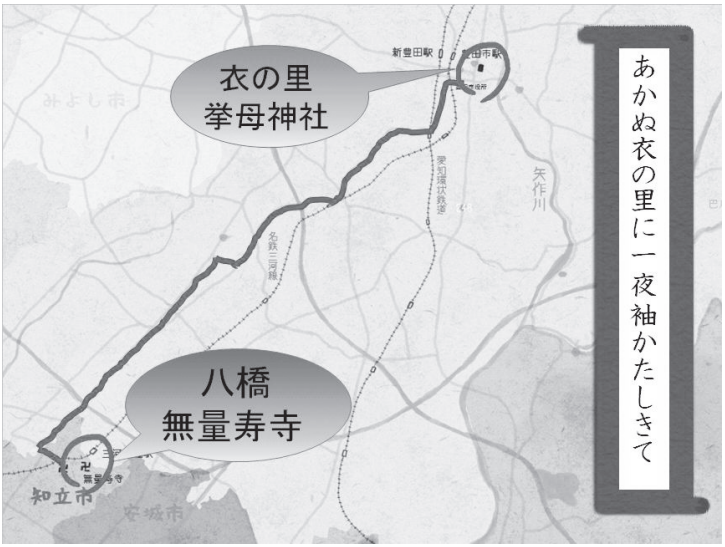
（図 4）

と、弟子たちに慕われていたことが伺える。

無量寿寺のそばには現在鎌倉街道と呼ばれる旧東海道が通っており、その街道筋にある「根上がり松」を見ることができた（図 4）。この付近には業平塚などの史跡が残されており、かつての鎌倉街道の風情が今に残る場所でもある。

三、衣の里、挙母神社

続いて踏査へ行ったのは、挙母神社である（図 5）。『弥生日記』冒頭に「あかぬ衣の里に一夜袖かたしきて」という記述があり、卓池らは八橋を見た後、衣の里、つまり豊田市を訪れて一晩過ごしている。「衣の里」は花の名所とされており、『夫木和歌抄』には、文永二年（一二六五）に源具氏によって詠まれた、「たちかへり猶見てゆかむ桜花ころもの里に匂ふさかりは」という和歌が残されている。「里花」を題に、衣の里の桜が満開の時には、やはり立ち戻ってでも訪れて見ていこう、と詠む歌である。この歌を知る室町時代の旅人たちの紀行文には、東海道を下り、三河国に至るあたりで、桜の花の名所の「衣の里」はこのあたりかとその名をなつかしんだという記述がある。



（図5）

『弥生日記』には、衣の里についてこれ以上の詳しい記述が見られないため、具体的にどの辺りを訪れたのかは分からない。しかし、衣の里の中心地にある挙母神社に参拝した可能性があるのではないかと考えられる。

挙母神社には「匂い桜」という非常に香りが良いと言われる桜と、芭蕉の句碑がある（図6）。句碑には、「木のもとに汁も鱠も桜かな」と刻まれ、桜の木の下で花見をしていると、花見の料理にも花びらがひらひらと舞い落ちてきて、春もたけなわである、という情景が詠まれている。

この句は、元禄三年（一六九〇年）三月二日、伊賀の国、酒堂という弟子の邸宅で開かれた「花見の歌仙」という連句の発句であり、芭蕉が実際に挙母神社を訪れて詠んだ句ではない。

桜の句と言えばこの句と言えるほど有名な句であり、愛知県内には岡崎城と半田に同じ句の句碑がある。挙母神社も「匂い桜」の木にちなみ、桜が詠みこまれたこの句を句碑にしたと考えられる。この句碑が建てられたのは、寛政十一年（一七八九）年と言われており、『弥生日記』が書かれる以前からあったため、卓池が挙母神社を訪れていたとすればこの句碑を見ていた可能性が高いと言える。ちなみに、句碑は当



（図 6）

時桜の木の根元に置かれ、草に埋もれていたそうである。写真にある台座が創られたのは、大正時代に入ってからと言う。

四、花園山

八橋、衣の里を見た卓池らは、最後に花園山を訪れる。花園山は、挙母神社から矢作川沿いに南下し、岡崎市に入った先にある。

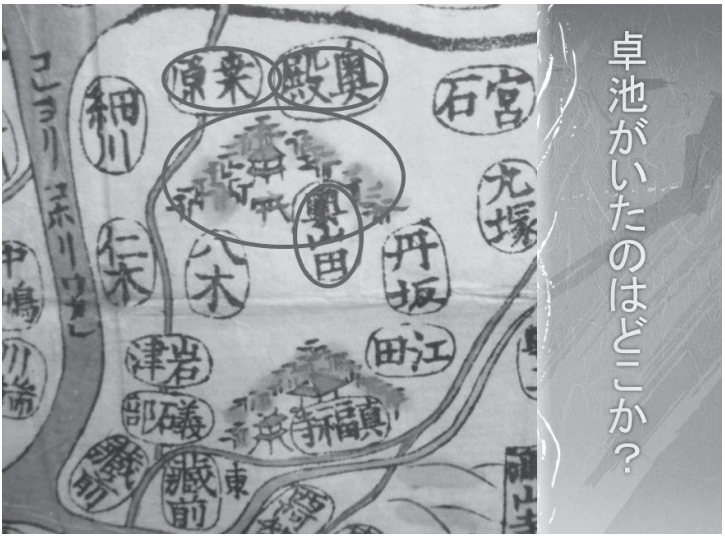
「花園山」という呼び方は、持統上皇が三河行幸でこの地を訪れた際、そのように呼んだと伝えられるもので、現在の山の名前は村積山と言う。持統上皇の三河行幸については『続日本紀』に記述が見られ、『万葉集』にその時詠んだとされる歌が収録されている。また、平安時代の私撰集『続詞花和歌集』、鎌倉時代に歌枕を国別に分けて記した歌書『歌枕名寄』にも、三河国の歌枕として「花園山」があり、名前にちなんだ和歌が見られる。

卓池らはこの花園山の麓で三週間余を過ごしたのだが、一体どの辺りに滞在していたのだろうか。

江戸時代に描かれた三河の国の絵図（図 8）には村積山も描かれており、山頂の村積神社と、下社と思われる鳥居も描


花園山の麓に出てやすらふ
挙母神社
花園山（村積山）
新豊田駅
豊田市駅
豊田市
矢作川
名鉄三河線
村積山
下宮

（図 7）


卓池がいたのはどこか？

（図 8）



（図９）　※ Google マップ

かれている。山の北側には奥殿、桑原という地名があり、南側には奥山田という地名が見える。これらの位置関係は、現在とほぼ同じと思われる。

上空から見た村積山付近の写真（図９）の右下の赤線で囲まれたところが村積山であり、北側の桑原神社のある辺りが昔の桑原村、南側には奥山田町がある。この奥山田町には、樹齢一三〇〇年にもなる枝垂桜があり、持統上皇自らが植えたと伝えられているようだ。卓池たちはこの桜を見に来たのかもしれない。

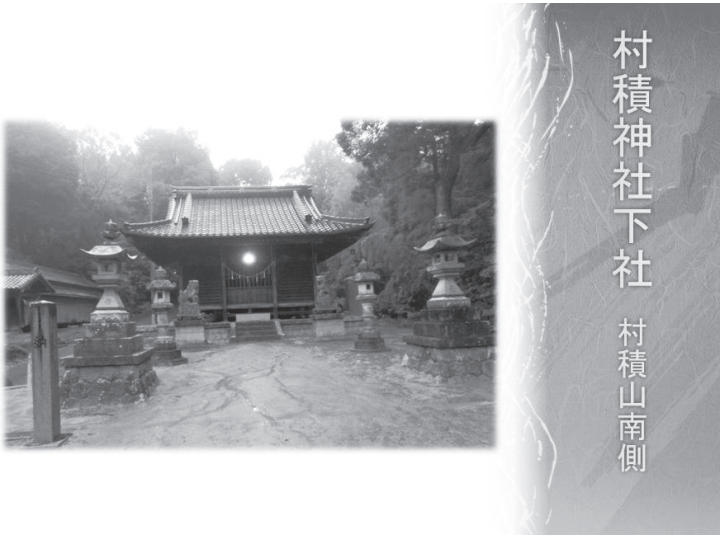
花園山周辺で私たちがまず見に行ったのは、村積山の北側、奥殿陣屋である。

奥殿陣屋は、江戸時代に奥殿藩の藩士や役人が勤務した施設である。藩主の住居や御殿、書院、学問所、道場などもあった。

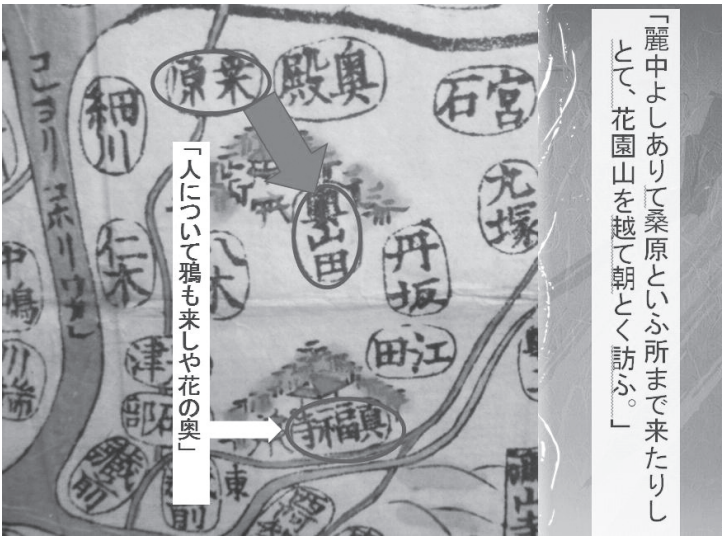
奥殿藩ができたのは正徳元年（一七一一）であるが、地理的・財政的な問題から、文久三年（一八六三）に信濃国・田野口村への移転が始まった。今では石垣とお屋敷の一部のみが残っている。現在、観光施設として公開されている奥殿陣屋は、江戸時代の陣屋の建物を復元したものである。卓池がこの地を訪れた当時は、まだ陣屋として機能していたが、ほどなく場所替えが行われた。


新豊田駅
豊田市駅
豊田市
みよし市
愛知環状鉄道
矢作川
名鉄三河線
奥殿陣屋
村積神社下社
村積山
下宮
岡崎市
三河八橋駅
無量寿寺
知立市
安城市

（図 10）


村積神社下社
村積山南側

（図 11）



(図 12)

最後に、村積山の南側、村積神社の下社にも足を運んだ。『弥生日記』本文の中に「麗中よしありて桑原といふ所まで来たりしとて、花園山を越て朝とく訪ふ」という記述が見られる。

麗中という弟子が桑原を訪れ、花園山を越えて卓池に会いに来た、と言う。桑原町は山の北側にあるため、この記述からは、卓池らが滞在していたのは村積山の南側ではないかという推測ができる。また、岡崎の方から卓池を訪ねて来た弟子が、その道すがら、真福寺にて「人について鴉も来しや花の奥」という句を詠んでいる（図12）。

なお、図13は本学図書館所蔵『三河国絵図』である。前出の図8及び図12は、この図13の一部を拡大したものである。

五、まとめ

以上が今回実地踏査で見てきた卓池たちの旅路である。調査の結果、卓池たちが八橋、衣の里を訪ねた後、村積山の南側に滞在していたであろうことが明確になった。『弥生日記』には、このほかにも多くの弟子の来訪記録や地名が見られ、足助から弟子が訪ねて来たことや、新城から文が届いたこと



（図 13）

が読み取れる。現在まだ読み進めている最中であるが、卓池ら三河の俳人たちの交流の様子を読み取ることができる興味深い資料と言える。

【付記】

本稿は、平成二十五年図書館貴重書講演会において発表した原稿をもとに作成した。

伊藤伸江先生をはじめ、多くの先生方にご指導賜わりましたことを記して感謝申し上げます。

『弥生日記』実地踏査（文字文化財研究所事業）報告書

伊藤伸江

【踏査日時】

平成二十五年十月二十日（日）　午前九時三十分～午後五時四十分

【踏査内容】

県大所蔵古俳書『弥生日記』ゆかりの地をめぐり、図書館での講演会、展示、研究会用に資料写真を撮影した。『弥生日記』冒頭部分「～花をこそたづねめと、まづ八橋の沢辺にさまよひきて、あかぬ衣の里に一夜袖かたしきて、霞かくれの岨道づたひに、花園山の麓に出てやすらふ」の、文章理解を実地探索からなした。途中、東海道、鎌倉街道、飯田街道、足助街道などの古道も意識し、当時の俳人のたどった経路を考察した。

【目的地とスケジュール】

① 無量寿寺（知立市八橋町にある八橋史跡の中心の寺・芭蕉句碑・卓池句碑等撮影）

（十時十五分着～十一時三十分発）

←

② 無量寿寺近辺の鎌倉街道の史跡（街道の根上がりの松・在原寺等撮影）

（十一時三十分着～十一時四十五分発）

←

③ 挙母神社（矢作川近くの衣の里の中心地・樹齢六五〇年の大楠）

（十二時十五分着～一時発、昼食）

←

（飯田街道から矢作川沿いに南下、川の大きさや道筋を体感）

④村積山（花園山）北麓、「花園の里」奥殿陣屋 熊野神社

（弥生日記文中「桑原」とでる桑原町側（西）から到着、北麓からの景観を体感し、山の姿を観察する。）

（三時着～四時十五分発）

⑤村積山（花園山）南麓、村積神社下社

（南麓からの景観を体感し、山への登山道を少しのぼったところにある神社撮影、「東の方へ出れば平原あり」との記述に留意し、東方に至る道もめぐった。）

（五時着～五時四十分発、そのまま流れ解散）

【参加者】

教員　伊藤伸江

院生　名倉ミサ子（車）、足立絵里奈（車）、加藤彩、加藤華、井上麻美、美濃羽紘子